

こともできなかった。日本への留学も、日本で働くという夢も、あきらめざるを得なかったと残念そうに話してくれた。ブルネイの無国籍者たちの様子が、クルドの子どもたちと重なった。

法的保護外の子どもたち

「国民一領土一国家」を三位一体とする国民国家から放逐された無国籍者、難民について「人権のアポリア（行き詰まり）」と述べたのはアーレント [アーレント 2017: 303-328] だが、諸権利が与えられずに法的保護外の「剥き出しの生」に置かれた人々の中でも、最も強くその影響を受けるのは幼い子どもたちではないか。

どの国に、どの民族に、どの国籍をもって生まれるかによって、子どもたちの将来を決めてしまっているのか。生まれによって規定された「在留資格」や「国籍」によって、将

来の可能性が狭められてしまう様は、ブルネイだけではなく日本においても存在した。子どもたちの幼心に夢さえもつことができない環境下で、生きる意味や希望を見出すことができるのか。彼ら・彼女らの将来を思うと、胸が締め付けられる。

引用文献

- アーレント, ハンナ. 2017. 『新版 全体主義の起源 2—帝国主義』大島通義・大島かおり訳, みすず書房.
- 上林千恵子. 2015. 『外国人労働者受け入れと日本社会』東京大学出版会.
- 西中誠一郎. 2006. 「いまだ悪夢から覚めることができない—新しい難民認定制度と難民申請者の現在」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報 2006』: 9-15.
- 日経ビジネス. 2016. 「なぜ埼玉県南部にクルド人が集まるのか?」 <<https://business.nikkei.com/atcl/opinion/15/221102/042000211/?P=5>> (最終閲覧日: 2021 年 12 月 3 日)
- Brunei Nationality Act. 1961.

ウシと暮らす

山 本 始 乃 *

ウシとの縁

記憶にある頃から筆者の身近にはウシがいた。家の周りには多くの酪農家が生活をして

おり、実家では肉牛用のウシを飼養していたこともある。小さい頃、友だちと外で遊んだり散歩に行ったりするとき、行き先には必ず

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 ケニアで撮影した家畜の写真

とっていいほど牛舎が含まれていた。鬼ごっこでは、ウシの間を駆け抜け、子ウシと触れ合ったりもした。ウシに囲まれた生活を送りながら小学生になったある日、授業で世界の子どもの生活を調べた。私はたまたまアフリカの子どもたちを担当した。当時、学校が大嫌いだった筆者は、「学校に行きたいのに行けない」子どもたちを見て衝撃を受けた。どうしてもアフリカに行きたい。彼らに会いたい。何か手助けがしたい。そう思いつづけて大学ではアフリカの研究をしている先生のゼミに入り、3年生で念願のアフリカ渡航を果たした。場所は、ケニア北東部の乾燥地域にある遊牧民の村。家畜と暮らす人についての研究をする目的だったが、1ヵ月という短い滞在だった。フィールドワークは衝撃のオンパレードだった。願いは叶ったものの、筆者のアフリカ熱はおさまらず、大学院でアフリカに行くことを夢みた。しかし、コロナウイルスの蔓延により渡航できない状況がつづき、国内での研究に切り替えた筆者は、またもやウシと暮らす人の研究をするようになった。

家畜と生きる

ヒトは、家畜と異なる種間の共生関係を結んで生きている [田名部 1991]。ケニア北東部乾燥地域の遊牧民はラクダやウシといった大家畜と、ヤギなどの小家畜を飼養している。乾燥地域では、人間が食べることでできない資源が多数存在しており、家畜が牧草や水を消費する。こうして家畜を介することで、人間が直接摂取できない資源がミルクや肉として人間の栄養になる。また、お金や婚資にもなる重要な財産にもなる。

遊牧民の子どもたちは、幼い頃から家畜と触れ合いながら暮らしている。家の周りや村には家畜がいて、ミルクや肉だけでなく、毛皮や血さえも利用する。筆者が訪れた村には学校があったが、学校に通う子どももいれば、学校に通わずに家畜の世話をする子どももいた。また、学校に通っていないながらも、将来の資産となる家畜を手に入れるために、学校に通うのではなく家畜の世話をしたいという子どももいた。田曉潔 [Tian 2016] によると、牧畜民の子どもは3歳頃から親や年長の子どもたちの活動を見て、家畜管理や遊牧の方法を学習するという。日常生活の中で牧畜民としてのノウハウや判断力を身に付けていく。幼い頃から家畜管理の仕組みの中に組み込まれて生活しているのだ。

私が訪れた鳥取や北海道の酪農家でも、子どもの日常の中にウシが組み込まれていた。散歩、遊び、手伝いなどウシと関わる機会は多い。ただ、小学生の頃まではそのような関わりをもつことが多いものの、中学生になると家畜との関わりは減少していくように感じ



写真2 放牧中のウシたち

る。同じ酪農であっても、家族経営の方が、子どもたちと家畜の関わりは深い。

家族経営の酪農家では、小学生の子どもがいれば、放課後に牛舎へ行き、可能な手伝いをする。どのような手伝いをするかはウシの飼養形態にもよるが、共通してみられたもののひとつはふんかき¹⁾であった。放牧をしている場合には、ウシ追²⁾いも手伝っていた。しかし、手伝いは毎日かならず行なわれるわけではなく、子どもたちの気分しだいである。家で過ごしたければ家で過ごすこともある。手伝いをしていないときには、子どもたちは牛舎や家の周りで遊んだり、学校の宿題をして時間を潰していた。家と牛舎が少し離れている場合には、子どもたちは、親の仕事が終わるまで牛舎で待っていた。小学生やもっと小さい子どもの中には、ウシを怖がって牛舎に入れない子や、少し怯えながら手伝いをする子がいた。

中学生になると、部活動や学校の課題に追われて帰宅時間が遅くなるため、牛舎に近づく時間はほとんど無くなる。そのため、子

もたちの中で最もウシと近い距離にいたのは小学生であり、牛舎へ訪れる頻度は大人に次いで多かった。

家畜に生かされる

筆者がフィールドで出会った人は、ウシは2つの生産物——ミルクや肉などの食物、そしてふん尿——をヒトに与えると言った。ミルクや肉は私たちヒトに直接恩恵を与えられる。一方、ふん尿は、堆肥となって土壌を豊かにし、農作物などの栄養になる。堆肥は近所の農家さんとも共有され、地域全体で活用されていた。農家は百姓ともいわれるように、生産物に関する知識の他にも、さまざまな知識が必要になる。たとえば、ウシの酪農家であれば、ウシが食べる草に始まり、草が育つ土、土の中の微生物、また天候についての知識も必要である。ウシが好きというだけで酪農家になれる時代ではない。経営や遺伝子などの情報や知識も必要である。さまざまな知識を駆使しながらウシの管理をすることで、生計を成り立たせている。

家畜の存在は、酪農に関わる作業以外にも、農家の日常の中に組み込まれていた。たとえば、食事である。ウシに子どもを産ませることで私たちはミルクを頂いているが、出産後数日間に搾乳されたミルクは出荷することができない。そのため、ミルクを家に持ち帰って初乳豆腐にすることもあった。また、毎日ミルクを持ち帰り、おやつやご飯、ヨー

1) ウシのふん尿を掃除する作業のこと。

2) 放牧地にいるウシを牛舎まで誘導する作業で、牛群の後ろから追いかける。



写真3 どうしても食べたいとお願いして作ってもらったミルク鍋

グルトにしたり、チーズを作ることもある。それらは他の家畜の餌になることもあった。

ある日、私は、ホームステイ先のご主人、別の農家さんと3人で話をしたことがあった。すると、ヒツジ農家の方が「(家畜に)生かしてんのか、生かされてるのか分からないよね」とつぶやいた。酪農家への滞在や今までの経験から、私はヒトがウシを管理して生かしていると思い込んでいた。しかし、2人のやりとりから、ウシがいることで生活が成り立ち、また酪農家は可能な限りウシに合わせて生活をしていることに気付いたのだった。酪農家はウシを生かしているのではなく、ウシがいることでウシの生産物を頂いており、人々はウシに生かされていた。

飼養されているウシ、毎日搾乳されるウシ、子ウシと引き離されて鳴くウシ、乳量が少なくなると廃棄されてしまうウシ。私たちが命を頂く背景には、たくさんのウシがおり、それぞれにさまざまな出来事がある。酪農家と暮らしながらウシと農家たちの関わりの現実を見て、知って、私は大好きな牛乳も



写真4 小さい頃からずっと飲み続けている白バラ牛乳

牛肉も受け付けなくなってしまった。ある人は言った。「その事実を受け入れてこそ、命を頂いて生きていくということ。」

アフリカに滞在していたときに、ヤギを解体してみんなで食べる機会があった。目の前で解体・調理されることで、命を頂くことの実感が湧く。だが、日本ではスーパーに行けば加工されている肉を簡単に手に入れることができる。毎日のように日常の中に組み込まれていたウシ。しかし、そこにある背景を知ったとき、当たり前のように食べ、当たり前のようにミルクを頂いていたことに疑問を覚えた。

「当たり前」からの脱却

私は、ウシと日常的に関わる距離にいながら、命を頂いていると感じることはできていなかった。また、幼い頃から家畜に関わっていた経験もあって、初めに訪れた調査地では、新鮮なこと、興味深いことを見つけることに苦労した。

鳥取における1ヵ月の滞在では、幼い頃か

らウシと触れ合ってきた筆者には「当たり前」のことばかりだった。しかし、それ以上に子どもが牛舎に遊びに行く姿や、ウシを飼養している人々の生活に新鮮な驚きは感じられなかった。調査をするために来たのに、何も「発見」することができずに淡々と過ぎていく日々に思い悩む。

ある日、県外から鳥取県内に嫁いだ方たちと話していた。田舎だからこその人との繋がりが、距離の近さについて話をしてくれた。全く気付かなかった視点や悩みばかりであった。新鮮さを感じさせなかったのは、幼い頃からウシと触れ合ってきたからだけではない。筆者自身が鳥取県の田舎出身であり、幼い頃からそのような関係性に組み込まれて生きてきたからでもあった。

一方、北海道では色々な気付きがあった。人々の関係性、取り組み、考え方など、その地域で行なわれている「当たり前」は、地域の中の人間にはみえないことも多くある。むしろ、他の地域から来た人間だからこそ、観察でき、分かることがあり、その土地の強みに気付くことがある。田舎では若年層が都会に出て行き、過疎化が進んでいる。地域の人々はそれを必死に止めようとする。だが、そこに居続けてもみえないものがたくさんある。外の人間になって初めて、地元や地域を俯瞰的にみて評価することが可能となる。

諦められないアフリカ

アフリカのことしか頭になく、日本のことは全く興味がなかった私は、コロナ禍のためいやおうなく実施した国内での調査を通し

て、地元や日本のことを知る大切さに気付いた。田舎では、年配の方たちがお茶を飲みながらガラケーが無くなることを議論していた。また、若者が都市部に流れていくことを必死に止めようとしている人たちもたくさんいた。これは筆者自身が田舎から離れた場所で生活を送っているからこそ、心に残ったことでもある。普段の生活の中でうすうすは感じてはいるけれど、実際に具体的な関係の中に組み込まれてみないと実感できないこと、考えつかないことがたくさんあった。

どれだけ日本のことに興味をもって、まだ知らないことがあると分かっても、しかし、まだアフリカを諦めることはできそうにない。大学院では、アフリカに行けると信じて疑わなかった2年前。今でも、いつか絶対にアフリカに行くんだと心で思っている。だが、アフリカに行く前に日本のことをもっと知ることは必要だったのだと思う。「コロナのせいで」とは誰でもいえる。そうではなく、「コロナのおかげで」日本で起きていること、田舎で人々が抱えている課題について知ることができた。いつかのアフリカを夢に見ながら、今日も日本のことを必死に考えている。

引用文献

- Tian Xiaojie. 2016. Day-to-Day Accumulation of Indigenous Ecological Knowledge: A Case Study of Pastoral Maasai Children in Southern Kenya. *African Study Monographs* 37(2): 75-102.
- 田名部雄一. 1991. 「ヒトと他の動物との共生の歴史」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』5: 135-172.